

学 位 論 文 要 旨

氏 名 岩崎 眞和

題 目 青年期の感謝と自己の発達に関する実証的研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究では、国内での臨床心理学的援助やヘルス・プロモーションさらには教育実践における感謝研究の効果的活用に向けた知見を得るため、日本人青年が日常生活で体験あるいは表出する“感謝”を認知・感情・行動の多側面から把握可能な尺度を開発し、感謝と自己の発達および精神的健康の関連を検証した。

第1章で国内外の感謝に関する心理学的研究の包括的なレビューを行い、第2章で冒頭の本研究の目的を明示した。欧米ではポジティブ心理学の隆盛と、GQ-6 (McCullough et al., 2002) をはじめとする感謝尺度の開発に伴い、2000年初頭から“感謝”に関するさまざまな心理学的研究が蓄積され、現在では応用的段階へと展開している。また、池田や蔵永・樋口を中心に欧米人とは異なる社会文化的背景を持つ日本人の感謝研究も蓄積されている。しかし、それぞれ課題がみられるため、第1章では信頼性と妥当性を有する日本人向けの感謝尺度や、感謝と自己の成熟度の関連を検証する研究の必要性について論じた。感謝の量的測定に先立ち、認知・感情・行動の包括的観点から“感謝 (appreciation)”を操作的に定義した。さらに、感謝研究における“世代間差”の考慮の必要性を論じ、セルフ・アイデンティティの発達過程で重要な時期であることや臨床的活用の観点から本研究の対象を“青年期”とした。なお近年の青年期の遅延化や進路選択の多様化を考慮し、18歳から大学院生を含む20代半ばまでを本研究の調査対象と定めた。

第3章の研究1では、国内外で開発された既存の感謝尺度の比較検討から共通する諸課題を抽出し、日本人青年の感謝の包括的測定に適した多因子構造の尺度を開発した。尺度開発に際しては、Adler & Fagley (2005) が開発した Appreciation Scale の下位概念を参考とし、他に国内外の感謝尺度と日本人の感謝や返礼行為に関する文献を基に項目収集および作成を行った。また対象喪失や過酷な逆境体験に伴う感謝の測定における倫理的配慮 (岩崎・五十嵐, 2004) から教示文の異なる part 1 と part 2 の2部構成とし、名称を“青年期用感謝尺度”とした。大学生を対象とした調査の結果、7因子構造 (享受・実存・負債感・返礼・忘恩・比較・喪失) が得られ、各因子とも統計解析を行う上で十分な信頼性を示した。

研究2では、研究1で開発した青年期用感謝尺度の信頼性と妥当性を検証した。妥当性の検証に際しては、友人関係におけるソーシャル・サポートの相互性ならびに感情体験の指標を用い、専門学校生と大学生、大学院生の感謝の差異も検討した。質問紙調査の結果、因子負荷量の低さより1項目を除外したが研究1で得た7因子構造が再現され、高い信頼性と妥当性を有する尺度としての活用可能性が示された。また、各感謝因子とも専門学校生と大学生、大学院生の3者間に有意差はみられなかった。

研究3では、青年期用感謝尺度の因子的妥当性と再検査信頼性 (interval 4 weeks) を検証した。専門学校生、大学生を分析対象とし、内容的妥当性と確認的因子分析の結果を基にさらに1項目を除外したが、研究2の7因子構造の妥当性が支持され、さらに各因子とも研究1や研究2と同様に統計解析において許容しうる信頼性を示した。

第4章の研究4では、研究2と同一の分析対象で、感謝と自己の未熟さを表す指標と考えられる“自己愛的脆弱性”の関連を検証した。自己愛的脆弱性の4つの下位因子を独立変数、感謝の7因子を従属変数とする重回帰分析の結果、女性よりも男性において自己愛的脆弱性傾向が感謝に反映しやすく、男女ともに“負債感”に対して“自己顕示抑制”と“承認・賞賛過敏性”が、また“忘恩”に対して“潜在的特権意識”がそれぞれ正の影響を示すことが明らかとなった。

研究5では、研究3と同一の分析対象で感謝と自己の成熟度を反映していると考えられる“甘え”および“精神的健康”の関連を検証した。相関分析の結果、男女ともに感謝に伴うポジティブな感情体験や返礼行為を表す中核的因子群（実存・享受・返礼・比較）と“喪失”が“健康な甘え”と、また“忘恩”が“屈折した甘え”とそれぞれ弱いから中程度の正の関連を示し、感謝が自己の成熟度を反映する結果を得た。感謝と精神的健康との関連では、男女ともに中核的因子群と“喪失”が“主観的幸福感”と弱いから中程度の正の関連、“負債感”が“抑うつ傾向”と弱い負の関連をそれぞれ示した。

第5章では、本研究の総括として、青年期用感謝尺度（35項目5件法）の各下位因子のうち中核的因子群と“喪失”が自己の成熟度を、逆に“忘恩”が自己の発達の未熟さを反映している可能性を指摘した。また日本人特有の“負債感”は“忘恩”と同様に自己の未熟さを表すだけでなく抑うつ傾向を強めることや、他の感謝因子の特徴や性差についても考察した。先行研究では、主に感謝の認知面・感情面に焦点が当てられ、感謝と自己の発達の関連を検証した研究はWood et al. (2009)を除いてほとんどみられなかった。しかし、本研究によって感謝に伴う行動面を含めた包括的測定と検討が可能となり、また青年期の臨床心理学的援助において“感謝”に基づく自己の発達や心理療法における予後の見立て、さらには日本文化での感謝研究の効果的活用や実践の一助となる知見が得られた。最後に、本研究の課題として、研究1の質問紙調査から約1ヵ月後の2011年3月11日に発生した東日本大震災が研究2以降の感謝を含む諸変数の測定に何らかの影響を与えた可能性や、“喪失”の量的測定（part 2）の限界などを指摘し、今後の日本人の感謝研究の展望を示した。